2025年度入学試験問題

国　語

注　意

一　問題冊子は一冊（十八ページ）、解答用紙は二枚です。
二　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
三　すべての解答用紙に、それぞれ二箇所受験番号を算用数字で記入しなさい。
四　解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
五　試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

問題　一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文に省略した箇所がある。）

いきなりだが、とてもたいせつなことをひとつ。日本語を書記するために、漢字、ひらがな、カタカナの三種の文字があるのではない。[1]三種の文字とともにある言葉が日本語をつくっているのだ。

日本語を学びはじめた外国の人々がまずはじめに当惑するのは、日本語に、漢字、ひらがな、カタカナという三種の文字による表記があることだという。たとえば漢字で「漫画」と書く場合もあれば、ひらがなで「まんが」、カタカナで「マンガ」と書く場合もあり、その使い方やニュアンスがビミョウに異なる。たしかに、これは世界を見渡してみれば特異な状態である。漢字表記とハングル表記を併用する韓国などを除けば、世界中のどの言葉も、基本的に一種類の文字で足りている。少しずつ違いがあるとはいえ、英語やフランス語、ドイツ語ではアルファベットを、ロシア語は古代教会スラブ語に由来するキリル文字を使う。ところが、日本語は三種類の文字を必要とする。

日本語を母語とするわれわれには当たり前であっても、これは外国人にとっては驚くべきことであろう。他国の言語を話す人々にとっては、日本語は学ぶのも難しいが、使いこなすのも難しい。彼らがとりわけ不思議に思い困惑するのは、かな文字に、ひらがなとカタカナの二種類があり、それらは同じ五十音を表す表音文字でありながら、かたちが違い、使用法も異なることである。日本語にはなぜ三種類の文字があり、なぜ三種類の文字を使用するのだろうか。

一般的には、日本語という一つの言葉が先にあり、それを書き表すための文字として、漢字、ひらがな、カタカナの三種類の文字があると教えられてきたが、この考え方に立つと三種類も文字はいらない。とりわけ、ひらがなとカタカナは、同じ文字数で、かたちが違うだけだから、どちらかひとつでこと足りる。日本にきた外国人の多くが、ひらがなとカタカナの併用に驚き、どちらかひとつに統一すればよいと考えるのも無理からぬことである。それでは、なぜわれわれはひらがなとカタカナを自在に使い分けるのか。

文字は言葉である。言葉を抜きに文字はありえない。日本語という言葉を書き表すために三種類の文字があるのではない。逆に三種の文字が、それにふさわしい意味、表現、文体をもち、その集合体として日本語が成立している。文字は言葉の記号ではなく、言葉はつねに文字とともに存在する。このように、文字の側から言語の世界を考えてみると、この国の言葉の実態にセマることができる。すなわち日本語という統一した言葉があり、それを書き表すために漢字、ひらがな、カタカナがあるのではない。三種類の文字があり、そしてそれぞれに対応する言葉が一体となって日本語があるのだ。

われわれは〈サクラ〉という言葉を、時と場合に応じて、漢字で「桜」、ひらがなで「さくら」、カタカナで「サクラ」と書きわける。だがそう考えるだけでは不十分である。漢字でなければならない、別の言い方をすると、「桜」という文字とともにある日本語が存在し、一方、ひらがなで表現せねばならない「さくら」、カタカナでなければならない「サクラ」という日本語がある[2]からである。これら三つの言葉を総合して日本語の〈サクラ〉はできている。このように発想を変えると、日本語に対する考え方もこの国の文化を見る目も変わってくる。

たとえば「民主主義」という言葉は通常、漢字で示す。「みんしゅしゅぎ」や「ミンシュシュギ」と表記されたらなかなかしっくりこない。むろん、デモクラシーの訳語である「民主主義」も、それは翻訳語として作られたもので、西欧での長い歴史を重ねてきた「democracy」とはジャッカン異なる。ひらがな語でその意味を翻訳するならば、デモクラシーとは、「ひと（人）びとがぬし（主）なるかんが（考）え」とでもなり、これではとても実用に堪えない。一般に政治や宗教、あるいは哲学や倫理の言葉の多くは抽象度の高い漢字による表現に依存しており、ひらがなには馴染まないからだ。

漢字で「桜」と書いた場合は抽象的で遠景的な、東アジア的なスケールをそなえ、「梅」と対比される、「桜花爛漫」など漢語的な文脈を浮き上がらせる。これがひらがなの「さくら」になると、ひらがな歌＝和歌とともに育てられた具象的で近景的な、春が来れば日を置かずに満開になり、風が吹けば花びらが散り、ひと晩雨が降れば翌朝には一気に散ってしまう、われわれが日常的に接している、愛しい「さくら」「さくらばな」の意となる。ひらがな語の「さくら」はわれわれの生活に近いところにあって、日常的美学を生み育てている。そして、学術的、生物学的に種を表現する場合にはカタカナで「サクラ」と表記する。動植

物などの学名、また外国の地名や人名など外来語にはカタカナを使用する類だ。近年、新聞や雑誌などで、動植物の名前はカタカナで書くことが定着している。漢字の草書体から作られた草仮名が簡略化したひらがなに対して、カタカナは万葉仮名として用いた漢字の偏、旁（つくり）、冠、脚など、その一部を取って作り出した表音文字である。もともと漢籍、仏典などの翻訳のためにできた符号に発する文字で、(3)漢語と漢語との間をこじ開けるようにして、テニヲハを補い、日本語を文にする役割を担った歴史を背負っている。

たとえば「春海（シュンカイ）」は東アジア全域、漢字語圏共通の言葉である。これにカタカナ「ノ」を挟みこんで「春ノ海」とすると、「シュンノカイ」にとどまらず、この東海の弧（ゆみ）なりの列島のひらがなの言葉に翻訳され、「はるのうみ」と読むことが可能になる。「春海」に日本語の読みが与えられて、「はるのうみ」へと変貌していく。

人々は、またこのとき「はるうみ」だけではなく、そこにカタカナの「ノ」という音を余分に挟みこみ、「はるノうみ」という音を与えた。「春」「海」をひらがなの言葉に翻訳するだけでなく、カタカナの「ノ」は、「はるノうみ」と発音として熟語として安定させるはたらきのイッタンを担った。さらに、漢字の言葉をそのままにストレートに受容し理解していた段階から、ちょっと待てよと、立ち止まり――「シュン」という音、「春」という文字とともにあるこの言葉は実は「はる」に相当するのではないか。「カイ」と発声し「海」と書く、あの「海（カイ）」は「うみ」と言い換えられるのではないか――。漢字語から連想できる言葉はいろいろあったはずだ。「みず」でもいいけれど、これに「うみ」という言葉を宛（あ）てよう、と試行錯誤がはじまった。(4)文字を書くことによって日本語がつくられ、その存在が支えられていった。

もともとこの国には文字はなかった。そのため日本語での書記を可能にし、女手（注おんなで）が誕生していくその展開を可能にしたのは、中国から伝来した漢字＝漢字語であった。そして漢字が伝来したからといって、たちまち日本語の書記が可能になったわけではない。多くの試行錯誤がここにはあった。

（石川九楊『ひらがなの世界――文字が生む美意識』による）

注　女手＝ひらがな。

問一　傍線部**アイウエ**を漢字に直しなさい。

問二　傍線部(1)について、「三種の文字とともにある言葉が日本語をつくっているのだ」と筆者が考えるのはなぜか、一般的な考え方と比較しながら理由を述べなさい。

問三　傍線部(2)について、「これら三つの言葉を総合して日本語の〈サクラ〉はできている」とはどのような意味か、本文の内容をふまえてわかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部(3)について、「漢語と漢語との間をこじ開けるようにして、テニヲハを補い、日本語を文にする役割」とはカタカナのどのような役割を指しているのか、本文の内容をふまえて具体的に説明しなさい。

問五　傍線部(4)について、「文字を書くことによって日本語がつくられ、その存在が支えられていった」とはどのような意味か、本文の内容をふまえてわかりやすく説明しなさい。

問題　二

次の文章は、小川洋子『寄生』の一部である。「僕」は、「彼女」にプロポーズをしようと待ち合わせ場所のレストランに向かっている際、駅前で突然、見知らぬ「老女」にしがみつかれた。やっとの思いで一緒に交番に行くと、「老女」は「僕」のことを、赤ん坊の頃に手放すことになった自分の息子だと「お巡りさん」に主張した。これを読んで、後の問に答えなさい。

気の毒そうにお巡りさんは言った。ええ、分かりますよ、もちろんあなたにだって都合はおありでしょう、しかし、この状態ではどうにもしようが……という表情を浮かべ、もう一度僕たち二人の姿をしみじみと眺めた。それからお巡りさんは老女の正体を明らかにするための業務に戻り、更にはその合間に、落し物を届けたり道を尋ねたりするためにやって来る人々を次々さばいていった。

忙しそうな彼の背中を見やりながら、僕はただため息をつくだけだった。それに気付いて老女が視線を上げ、初めて目と目が合った。自分がどんな事態を招いているのかも知らず、彼女は堂々と僕を見つめた。白目は濁り、睫毛の付け根には目やにがたまっていたが、瞳はその奥底にまで深い黒色をたたえていた。瞳にだけ、老いの影が差し込んでいないかのようだった。

気分を落ち着かせるため、僕はお巡りさんが出してくれたお茶を一口飲んだ。すっかり冷めて渋くなったお茶だった。その間もずっと老女は僕に視線を送ったままでいた。ああそうか、彼女はこうしている限り一人でお茶も飲めないのだ、と僕はようやく思い至った。

「飲みますか？」

瞳を見開いたまま、老女は黙ってうなずいた。左手で湯飲みを持ち、とっくり[注一]セーターを濡らさないよう慎重に老女の口元へ近付けると、彼女は唇を突き出して二口三口すすり上げた。ずるずると震える唇の音が、すぐ耳元で聞こえた。

赤ん坊にお乳をやるというのは、こんな感じなのだろうか。老女の口元を見つめながら僕はふと考えた。自分よりうんと小さくか弱いものが腕の中にあり、二人の体温が一つに溶け合っている。小さいものは疑いを知らず、ただ無防備に体を預け、それでもう何の心配事もないと安心している。僕から差し出されるものを受け止めようと、ひたすら唇をすぼめる。かつてお乳があふれて痛いほどだった胸は、いつしかすっかりしぼんで肋骨に垂れ下がり、二人の隙間に身をひそめている。

電話の応対の様子から事態が進展していないのは明らかだった。外はすっかり闇に包まれ、それでもまだ吹き止まない風が街路樹の梢を揺らしていた。時計の針はゆっくりと待ち合わせの時刻を過ぎていった。

彼女と初めて出会ったのは虫博物館の入口だった。切符を買って入場した途端、ファンファーレが鳴り、薬玉が割れ、一体何事かと思っている間にパシャパシャ写真を撮られた。

「おめでとうございます。入館者百万人めです」

二列に並んだ職員たちから一斉に拍手が湧き起こった。皆、愛想のいい笑顔を浮かべていたので、状況はよく分からないながらも自然と口元だけは弛んだ。薬玉から下がる細長い模造紙には確かに、〝祝・入場者百万人突破記念〟と書いてあった。お世辞にも綺麗とは言いがたい字で、そのうえ所々墨が垂れていた。

「本当におめでとうございます」

模造紙を読んでいる間にもすぐさま花束贈呈となり、記念品の授与があった。

「是非、取材をお願いします。まず、今のお気持は？　ここにはよくいらっしゃるんですか？　虫で一番お好きなのは？」

『月刊・虫仲間』という腕章を付けた男が次々と質問をしてきた。

「今日は、デートですか？」

そう言われて初めて、すぐ後ろにいる女性とカップルに間違われたのだと気付いた。

「虫博物館でデートなんて、いいですねえ。羨ましい。そのうえ百万人めですよ。お二人の未来に幸あれ」

『月刊・虫仲間』の編集者は一人、満足そうにうなずいた。

結局僕たちは二人一緒に館内を見物することになった。今さら、デートなんかじゃありません、と言ってその場を白けさせるのも野暮な気がしたし、成り行きで彼女まで花束をもらってしまい、もう後には引けなくなっていたのだった。

僕たちはぎこちなく虫の展示を見て回った。丁度『ヒトに寄生する虫たち〜その離れがたき関係〜』という特別展の開催中で、盲腸に寄生したギョウ虫、小腸のカイ虫、脳で発育したエキノコックス、眉毛に潜むアタマジラミなど、いろいろと気色の悪い虫たちが並んで

いた。注二ホルマリンに浸かっているのもあれば、プレパラートに載って顕微鏡にセットされているのもあった。

元々僕は虫になど興味はなく、その日もたまたま時間つぶしに立ち寄っただけで、寄生虫と初対面の女性を前にどんな会話をしたらいいのか見当もつかなかった。そのうえ他の見学者たちが「あの人たち、百万人めの人よ。百万人めよ」とこそこそ言い合っているのが聞こえ、ますます落ち着かなかった。大きすぎる花束と、何が入っているのかやたらと重い記念品の袋を持て余しながら、僕はただ女性の歩調に合わせているだけだった。

それに引き換え彼女の方は屈託なく寄生虫を楽しんでいた。いちいち何かしら驚きや畏怖や感嘆の声を上げ、ガラスケースに額を押し当てたり、のけぞったり、笑ったりした。そのたびに花束のセロファンが二人の間でガサガサと音を立てた。

彼女が最も大きな反応を示したのは、人間の眼球に卵を産むハエだった。中央アジアの砂漠地帯に生息するハエで、素早く人間の目元をかすめ、水分といい柔らかさといい申し分のない眼球の表面に卵を産み付けるのだ。放っておくと卵はずんずん粘膜の奥へと沈んでゆき、そこに身を潜めたまま、こっそり孵化するらしい。

「ねえ、どう思う？　自分の目の中でハエの卵が孵るの」

「そりゃあ、もちろん、ぞっとします」

「きっと、ゴロゴロして目をこすればこするほど、ハエの思う壷なのね。卵が奥深く埋まるから」

「なるほど」

「でも私、自分の目がそんなふうに役に立つなら、差し出しても構わない。卵のゆりかごとして」

「えっ」

「ただし、成長したハエが目を突き破って飛び出してくるのはちょっと御免だわ。目蓋と眼球の隙間を、するりとくぐり抜けてくれるならいいけど」

彼女はこちらを振り向いた。カスミソウの向こうに笑顔が見えた。眼球の話をしているおかげで、遠慮なく彼女の目を見つめることができた。

「あら」

彼女が不意に、僕の頭に手をのばした。

「紙ふぶきが……」

そう言って、髪の毛にまだくっついていた薬玉の紙ふぶきを、そっと払ってくれた。

保育園の保母をしている彼女は、あの日、遠足の下見に来ていたのだった。砂漠のハエのために自分の眼球を提供しても構わないというくらいの人だから、虫博物館の記念の入場者になれたことを、とても喜んでいた。

「これできっと、遠足も上手くいくわ」

「ええ、そうでしょう」

「縁起がいいじゃない。何といってもあなたは百万人めで、私は百万一人め」

「はい」

「あなたのおかげね」

「とんでもない」

「いや、あなたのおかげよ」

虫博物館を出たあと、僕たちは喫茶店でお茶を飲み、記念品の袋を一緒に開けてみた。天道虫のカフスボタン、注三黄金虫が刺繍された財布、蜂蜜一瓶、油蟬の形をしたチョコレート一箱、ガラス製の蝸牛のペーパーウエイト注四等が入っていた。カフスボタン以外、全部彼女にあげた。

「本当にいいの？」

「はい、どうぞ」

「やっぱり今日は、運がよかった」

彼女の目は、ハエでなくてもその黒い瞳に指先を浸してみたいと思わずにはいられないほど、瑞々(みずみず)しく輝いていた。

「ごめんなさい。あたし、間違えてました」

ずっと無言だった老女が急に口を開いたので、お巡りさんと僕はびっくりし、互いに顔を見合わせた。

「思い出しました。この人、あたしの息子じゃありません」

「思い出した？　そりゃあよかった。じゃあ、このおにいちゃんの腕、離してあげようか、おばあちゃん」

「お父ちゃんでした。息子でなく。ああ、えらい間違いを仕出かすところだった。危ない危ない」

そう言って老女は足を組み替え、更に念入りに僕の右腕を締め上げた。指先はいつの間にか痺(しび)れて感覚が無くなっていた。

「子供の頃、荷馬車に轢(ひ)かれて右腕がちぎれてしまった可哀相(かわいそう)なお父ちゃん。だから二度と右腕が無くならないよう、こうして一生懸命守っているんです」

お巡りさんはため息をつき、再び電話に戻った。

『月刊・虫仲間』の人に、「幸あれ」と祝福された僕と彼女だったが、交番の中には幸せの欠片(かけら)さえなく、それどころか時計の音と共に不吉な気配だけが忍び寄ってくるようだった。レストランのテーブルに、一人ぽつんと座っている彼女の姿が目に浮かんだ。いつもは保育園児たちのよだれや鼻水のついた服を平気で着ている彼女だけれど、きっと今晩はお洒落(しゃれ)をしているに違いない。お化粧をして、髪もセットして、ヒールのある靴を履いている。入口で人の気配がすれば振り返り、そのたびに裏切られ、しょんぼりとうつむく。本来居るべき場所にたどり着けないまま僕は、老女と一緒に交番のソファーに腰掛けている。

ギョウ虫もカイ虫もエキノコックスもアタマジラミも、こんなふうに宿主に寄生するのかもしれない、と老女の帽子の毛羽立ちに視線を送りながら僕は思った。相手の都合など考慮せず、音もなく忍び寄り、最も柔らかく最も温かい部分に居場所を定めると、あとはもう何があっても離れない。一生、相手の一部となって生き続ける。

不思議なことに僕は、老女に取り付かれたこの格好に少しずつ慣れてゆくのを感じていた。最初は鬱陶(うっとう)しくてならなかったのが、無意

識に力の入れ具合を調節し、余分な緊張を解き、自分と老女の輪郭を自然なつながりでとらえられるようになっていた。冷たく痺れた指先は自分から遠のき、元々この右腕は老女のものだったのではと錯覚するほどだった。

夜になって交番の中はますますひんやりとしてきた。ロータリーを行き交う人々のざわめきは風に紛れ、ただ老女と僕、二人だけが静けさの中に取り残されていた。二人を助けるために奮闘してくれているはずのお巡りさんさえ、僕たちとは無関係な人のように思えた。最早(もはや)僕たちの間につなぎ目などなく、ジャケットも毛糸も皮膚も脂肪も骨も、一続きになって小さな静けさを守っていた。

「［　　ア　　］」

虫博物館で初めて会った時の彼女の言葉が、そっとよみがえってきた。砂漠をさ迷う一人ぼっちのハエを安堵(あんど)させるように、自分も老女のために右腕を差し出したって一向に構わないじゃないか。失われてしまったお父さんの右腕か、お乳をやれなかった赤ん坊か、いずれにしてもその身代わりになれるのなら、お安い御用じゃないか。そう、僕はつぶやいた。

結局、老女の身元が判明したのは、待ち合わせの約束から一時間以上が過ぎた頃だった。老女を迎えに来たのは、黒いズボンに薄ピンク色のスモック[注五]を着た、老人施設の職員だった。

「さあ、帰ります」

可愛(かわい)いピンク色とは不釣り合いな、容赦のない口調で職員は言った。驚いたことに老女は、お巡りさんと僕があれほど苦心して引き離そうとしてもびくともしなかった体を、すうっと浮かせて立ち上がった。ひっついた時と同様あまりにもひっそりとした動作だったので、僕はしばらく老女が離れたのに気付かなかった。事の次第を理解できたのは、老女の姿と自分の右腕を何度も見比べたあとだった。

「ご迷惑をお掛けして、大変申し訳ございませんでした」

職員は礼儀正しく謝罪の言葉を述べたが、その声は僕の耳には届いていなかった。僕はただ老女の後ろ姿を見つめるだけで精一杯だった。

二人の距離はほんの一、二メートルといったところなのに、なぜか、随分遠くへ老女が取り残されているように見えた。体の右側で感

じていたより、老女はずっと小さかった。背中は丸まり、首は骨が浮き出し、スカートの裾からのぞく両足は湾曲していた。全身を包む毛糸の衣装はどれもだらしなく弛み、締りがなかった。僕の右腕を手放した途端、(1)全身から養分が蒸発してしまったかのようだった。

「さあ、ちゃんとお詫びをおっしゃい」

職員に促され、老女は更に体を小さく縮め、おっぱいの痛みや父親の右腕について語った時とは比べものにならないか弱い声で、何かもごもごと喋った。その傍らでお巡りさんは、ようやく片が付いてやれやれといった様子で、「よかったねえ、おばあちゃん。やっと帰れるねえ」などと朗らかに繰り返していた。

「本当にすみません。ちょっと目を離したすきに、一人で外出してしまって。昔、この駅のそばで編み物教室を開いていたので、それを思い出したのかもしれません」

「編み物の先生だったんですか」

僕は尋ねた。

「はい。何十年も昔の話ですが」

職員は答えた。

「謝る必要なんてないんですよ」

と、僕は老女に向かって言った。

「あなたは何も悪いことなどしていないじゃありませんか」

老女は無言でうつむいたまま、顔を上げようとしなかった。さっきまで僕にしがみついていた両腕は、役目を失い、心もとなく垂れ下がっていた。

老女と職員が交番を出て行ったあと、僕は自分の右側を見た。(2)ジャケットには指の跡が、ズボンには絡まる足の跡が皺になって残っていたが、もちろんそこにはもう誰もいなかった。一続きだった輪郭は解け、ただ小さな空洞が僕に寄り添うばかりだった。

（小川洋子『寄生』による）

注一　とっくりセーター＝首元の部分が丸く高いセーター。タートルネックのセーターと同じ。

注二　ホルマリン＝生物の標本をつくる際、固定、防腐処理を目的に広く用いられる薬液。

注三　カフスボタン＝ワイシャツの袖口を、ボタン代わりにとめる装飾品。

注四　ペーパーウエイト＝紙や布など、軽いものが風に飛ばされないようにするための重し。

注五　スモック＝衣服の汚れ防止などのために着る、ゆったりとした上着の総称。

問一　空欄 ア には、それまでの場面における発言が同じ形で繰り返される。初めの三字のみ書き抜きなさい（「　」を除く）。

問二　傍線部(1)について、この表現はどのようなことの比喩か説明しなさい。

問三　傍線部(2)について、このときの「僕」の心情をわかりやすく説明しなさい。

問四　次の会話は、右の文章を鑑賞した三人の読者A・B・Cによるものである。空欄 イ ～ エ に入る適切な内容を、本文をふまえて、会話に合う形で答えなさい。

A―『寄生』の作品世界は、場面の展開に特徴がありますね。

C―まず冒頭では、「僕」は、「老女」を「赤ん坊」のように見ていますよね。

B―二重傍線部の「赤ん坊にお乳をやるというのは、こんな感じなのだろうか。」というところですね。

C―なぜ「僕」は二重傍線部のように思ったのでしょう。

A― イ からでしょうね。

B―ただ「僕」はとても迷惑そうな感情もあるにはありますよね。ため息までついていますし。

A―でも、終盤を読むと、「老女」に向かって「謝る必要なんてないんですよ」と言うまでになっていますよ。

B―なぜ、冒頭では迷惑そうだったのに、最後にはそのようなことを言うまでになったのでしょうか。

C―中盤を見ると、「彼女」との出会いを思い返す場面がありますね。ここに変化の理由がある気がするのですが。

A―きっとそうでしょうね。終盤で「謝る必要なんてないんですよ」と「僕」が言うまでになったのは、それまでの展開も関連させてまとめると、［　ウ　］からだと言えるのではないかと考えます。

B―プロポーズをしようとしているほどに、「僕」にとって影響力のある「彼女」だからこそ、「僕」の認識に影響を及ぼしたのでしょうね。

A―その結果「老女」にしがみつかれて迷惑がっていた「僕」も、「老女」の存在を受け入れるようになったのでしょう。

C―そう考えると、「僕」はなぜ「彼女」との出会いを思い起こしたのでしょうか。

B―それはプロポーズをしようとしていたからでしょう。待ち合わせのことを気にしている場面がありますし。

A―加えて、「老女」に「彼女」を思い起こさせる面があったから、というのも考えられると思います。

B―年齢からして全く違う気がするのですが。

A―「僕」の認識の中で、「老女」と「彼女」の外見で共通するところがありますよね。具体的に言うと、どちらも［　エ　］というところなのですが。

B―なるほど、確かにこの作品を通して、その部分に関する表現が多いですね。

A―寄生という言葉は否定的な意味合いを感じさせますが、この作品はその見方を変えようとしているようですね。

C―小川洋子の他の作品も読んでみたくなりました。

（次のページにも問題があります。）

問題　三

次に掲げる（A）は『伊勢物語』の一節であるが、その中の「なかなかに」の歌は、『万葉集』の歌（B）と類似していることが知られている。（C）はそのことについて述べた藤原俊成の歌論の一部である。これらを読んで後の問に答えなさい。

（A）昔、男、陸奥（みちのく）の国にすずろに行き（ゆき）いたりにけり。(1)そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、ア せちに思へる心なむありける。さてかの女、

イ なかなかに恋に死なずは桑子（注一）にぞなるべかりける玉（注二）の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。ウ さすがにあはれとや思ひけむ、いきて寝にけり。夜ぶかくいでにければ、女、

夜も明けばきつ（注三）にはめなでくたかけ（注四）のまだきに鳴きて背なをやりつる

といへるに、男「京へなむまかる」とて、

(2)栗原の姉歯（注五）の松の人ならば都のつと（注六）にいざといはましを（注七）

といへりければ、(3)よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひをりける。

（『伊勢物語』による）

（B）なかなかに人とあらずは桑子にも エ ならましものを玉の緒ばかり

（『万葉集』巻十二による）

（C）伊勢物語はまことにあることをも書けり。また、田舎人（ゐなかびと）などのありさまは、さしもなきことをも、をかしきさまに書きなし、ものをも言はせ、歌をも詠（よ）ませたることもあれば、古き歌に合（あ）ひたることのある時、その歌を言はせても侍（はべ）らむ。また、同じき物語に、「男、

陸奥（みちのく）の国まですずろにいにけり。そこなる女、京の人をばめづらかにや思ひけむ、せちに思へる心なむありける。さてかの女の詠みけるとて、

なかなかに人とあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり（注八）

これまた、万葉集の同じき第十二の巻（まき）の歌なり。されば、これも陸奥（みちのおく）の女のことををかしく言はむとて、万葉集の歌のさもありぬべきを言はせたるにもやあらむ。

（藤原俊成『古来風躰抄』による）

注一　桑子（くわこ）＝蚕のこと。以下、蚕にでもなれば恋の苦しみから逃れることができるのに、という心情を歌う。

注二　玉の緒ばかり＝わずかな間だけでも。

注三　きつにはめなで＝未詳。「水槽にぶち込んでしまおう」の意の東北方言とする説がある。

注四　くたかけ＝鶏を口汚くののしって言う語。鶏のやつが早く鳴いたために「背な」（夫）が帰ってしまったと歌う。

注五　栗原の姉歯の松＝「栗原（くりはら）」「姉歯（あねは）」は陸奥の地名。

注六　人ならば＝人並みだったら。

注七　都のつと＝都への土産。ここは「女」を都へ連れて帰ることを指す。

注八　なかなかに＝『伊勢物語』の歌とは小異があるが、俊成は『伊勢物語』の歌と『万葉集』の歌とを同じものと考え、『万葉集』の形で引用している。

注九　さもありぬべき＝（その場面で）いかにもそうありそうな歌。

問一　傍線部**アイウエ**を現代語訳しなさい。

問二　傍線部(1)「そこなる女」は（**A**）の文中でどのような人物として描かれているか。（**C**）を参考にして説明しなさい。

問三　傍線部(2)の歌で「男」はどのようなことを「女」に伝えようとしているのか。「まし」に注意して説明しなさい。

問四　傍線部(3)「よろこぼひて」とあるが、なぜ「女」は喜んだのか、本文に即して説明しなさい。

問五　『伊勢物語』の歌と『万葉集』の歌（**B**）が類似していることについて、俊成はどのように考えているか、（**C**）の本文に即して説明しなさい。

（次のページにも問題があります。）

問題　四

次の詩は白居易の作である。これを読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、送り仮名を省略した所がある。）

喚二笙歌一[注一]

露ハ墜[注二]萎花ノ槿[注三]

風ハ吹ク敗葉荷[注四]

老心ニハ歓楽少ナク

秋眼ニハ感傷 A

芳歳今如レ此クノ[注六]

衰翁可奈何[1]

猶応レ不レ如レ醉フニ[2]

試遣レ喚二笙歌一[3]

注一　喚笙歌＝宴席を盛り上げるための楽隊を招く。笙は笛の一種、ここでは音楽を指す。

注二　萎花＝しおれた花。

注三　槿＝むくげ。朝に咲いて夕方にしぼむ。

注四　敗葉＝枯れた葉。

注五　秋眼＝秋になって自分の目に映るもの。

注六　芳歳＝若さ。

（『白氏文集』による）

問一　この詩は近体詩である。詩形を漢字四字で答えなさい。

問二　空欄 A に入る最も適当な語を次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

①　家　②　衆　③　多　④　的　⑤　寡

問三　傍線部(1)をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。

問四　傍線部(2)をわかりやすく現代語訳しなさい。

問五　傍線部(3)「試遣喚笙歌」の句に込められた作者の思いを、詩全体をふまえて説明しなさい。